

## 私の高齢者相互支援活動について

上毛町老連 中村老人クラブ  
支援活動員 二反田 和美

私達の住む上毛町は、平成の大合併により明治初期までの名残の地名であった豊前の国上毛郡から町名を取ったもので上毛（こうげ）と読みます。

山国川を挟んで大分県に隣接する人口 7,900 人余りの小さな町ですが、風光明媚・緑豊かで自然に恵まれているところに、国道 10 号線が南北に貫き更にこの 3 月には高速も開通し、利便性にも申し分なくまさに住みやすい町となってきています。山の幸は勿論、海も近く海産物にも恵まれ色々とおいしい食材が豊富で、道の駅等を通じて販売致しております。又山あい設けられた民宿では地区に居る経験豊かな方たち（高齢者が多い）と一緒に造る体験料理を通してのおもてなし食事大変好評です。

今日は「高齢者相互支援活動リーダー研修会」の事例発表に当り私の住んでいる上毛町中村地区の私の支援活動の一端をお話しして皆様の参考になれば幸いです、私の足りない所やご意見などありましたらご助言を仰ぎたくよろしく願いいたす次第であります。

私は上毛町生まれの上毛町育ちです。ですから地元の皆さんには小さい時から馴染み深く、可愛がっていただきながら育ちましたので高齢者相互支援活動における支援活動員になってからも地域に感謝奉仕を含めて自分の出来る範囲内に於いてはなんでもさせて頂こうという気持ちでいました。現在私は二人の支援活動を行っていますが、以前には施設に行かれた方や亡くなられた方もいて今まで 5 人ほどの方の支援をしまりました。年を重ね、今度はいつ私が支援を受けるか分からないような年齢にもなってきました。

実は、本日ここで取り上げる A さんはすでに亡くなられた方ですが、亡くなる少し前に起きたちょっとした事件？の事に触れてみたいと思います。A さんは現役の時は警察官でした。子どもはいますが当時、北九州に住んでいて親の家には立ち寄る事が少なく、奥さんにも死に別れ一人暮らしでした。少し認知症になりかけてるようなところも見受けられました。週 3 回はヘルパーさんが来ていましたが、私が訪問するととても喜んで、色々と昔話を話しかけてきて長時間にわたることもしばしばでした。時々出来合いのおかずなど持って行ってあげると、大変嬉しそうに食べていたのを思い出します。私が帰る時なんか玄

関まで出てきて手を振って見送ってくれてました。事件(?)という程のことではないかもしれませんが、こんな事が有りました。日ごとに寒くなる12月のことでした。その日私は用事で出かけて帰ってきたところ、たまたまAさんの子供がAさん宅に様子を見に来たら居なくて、“しばらく待っても帰ってこない、付近の山まで捜しても見当たらない”と不安そうに駆け込んできたというではないか。私もびっくりしました。すぐに心当たりを訪ねたり電話したりしましたがわかりません。どうしたものかと途方に暮れてましたが、ふと私の家の離れに気が付きました。そこには子どもたちが住んでいて、日中は小さな孫が居るはずなので、もしかしてと思い離れの2階にいるの孫を見つけ呼んで聞いたところ“知らないおいちゃんがソファにかけて電話している”との事。

家に入ってみるとソファに座っているのはやはりAさんでした。

Aさんは昔の職業柄か警察に電話したらしく、間もなくパトカーが私の家の玄関に止まりこれ又ビックリ。どうも電話でパトカーを呼んだらしい。私も警察官から事情聴取を受けたりしましたが、結局Aさんは警官がパトカーで家まで送って行きました。警官曰く「一人暮らしの寂しさに加え少し被害妄想が有るようです」と。先ずは一件落ち着いたものの、この笑うに笑えぬ出来事はAさんの不安げな顔と共に今でも私の脳裏に焼き付いています。そして少子高齢化に核家族化の進む中、残された高齢者は「老いの孤独感」から不安と淋しさを抱えています。その大きな一点として、伴侶や愛する人との別れだと思えます。そこには精神的な大きな問題が有るようです。

「人は一人では生きて行けません」次は我が身と思わねばなりません。現在この高齢者を取り巻く社会では住み慣れた地域で安心して暮らせるためにあらゆる施策が為されています。民生委員、福祉委員、社協やサロン、地域包括支援センター等、そして新聞配達から郵便配達、電気検針やガス屋さんまで高齢者見守りネットワークを張り巡らしています。原点である私達老人クラブの愛の一声運動に始まる高齢者相互支援活動も先頭に立って旗振りしてゆかなければなりません。私もその一人として微力ながら続けて行くつもりです。

ご静聴有難うございました。

